

生命の自然治癒力

— V・v・ヴァイツゼカーの「エス」の概念をめぐって —

丸橋 裕

要 旨

西洋古代の医学哲学を代表するヒポクラテス学派にとって、人間の自然本性（ピュシス）を正確に知る道は医術でしかなかった。ピュシスこそが治癒力そのものであり、医者はその援助者の機能をもつにすぎない。一方、プラトンは、病気のピュシスを、病む人と医療者との対話的な相互関係のなかで吟味するという独自の視点を提供した。こうしたピュシス概念を「エス」の概念として現代によりみえさせたのは、G・グロデックである。本稿の目的は、V・v・ヴァイツゼカーが、グロデック、フロイトらの影響のもと、いかに「エス」概念を彼独自の「主体」概念と関連づけ、また病む人と医療者との相互関係というプラトンの視点から、これをいかにその医学的人間学の構想の中に位置づけようとしたかを明らかにすることにある。

まず、グロデックの「エス」概念が心的・身体的な諸現象のすべてを動かしている無意識的な生命力を意味していることを確認したうえで、「身体事象と神経症」、『自然と精神』、『ゲシュタルトクライス』などでヴァイツゼカーがこの概念をどのように用いているかを概観する。生きものは生命そのものとの根拠関係に依存して生きているかぎり、環界とのあいだで「主体」というかたちの「出会い」を繰り返すのであるが、このような意味で「主体」が形成されているとき、人間はこれを「自我」として意識する。しかしこの主体は、もともとそこで自我として意識されるようになるものと環界との境界面に形成されるものであるから、同時に外部に「客体」として「エス」を析出せざるを得ないのである。

しかし、こうした「エス」概念は、医者と患者の相互関係というヴァイツゼカーの医学的人間学の出立点にとってどういう意味をもつのか。この視点から、あらためて最初期の論文「医者と患者」、「痛み」における「エス」概念の導入状況を分析し、医療者にとって治療とは、病む人との相互関係のなかで、「自我」の形成を促すだけでなく、病む人とその環界との出会いの場において「エス」の形成を生みだすことを共に追求する営みであることを明らかにする。このようにして、ヴァイツゼカーが、医療者と病む人との相互関係のうちに生命の自然治癒力（ピュシス）が発現する場を見出し、こうした「生の相互性」を一つの礎石として彼の医学的人間学を構築しようとした、ということが結論づけられる。

キーワード：自然治癒力、ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカー、ピュシス、エス、主体

I. はじめに

「生命の自然治癒力」とは何だろうか。「自然治癒力」とも「自己治癒力」ともいわれるとき、その「治癒」とは何を意味しているのか。日本語の「癒す」は他動詞であり、ひとに対しても、病気に対しても用いられる。これを受動態にして、「癒されたい」とか「傷を癒された」とかいう場合もある。しかし、「癒える」という自動詞もあって、「病いが癒える」とか、「心の傷が癒える」とかいわれる。

「癒す」という他動詞形は、まず人と人とのあいだや、人と病気のあいだの治療的関係を示している。「癒す」ということは、処置するということである。それに対して、「癒える」という自動詞形は、病んでいるからだから自身のうちから癒えてくる働きを表している。たしかに治癒は、人と人とのあいだでいうなら、医療者と病む人とのあいだの癒し、癒される関係において生ずる。しかしその場合に、医療者はけっして治癒そのものを作り出すことができるわけではないだろう。医師であれ、看護師であれ、一般に医療者がその技術によって治癒そのものを作り出すことができると考えることは、ヒュブリス（傲慢）ではないか。20世紀ドイツの医者哲学者ヴィクトア・フォン・ヴァイツゼカー（1886-1957）はこう語っている。

『『病気の意味Sinn der Krankheit』はただ病む人の側からしか実現され得ず、医者側から要求されてはならないものである。病む人にとってこの意味はひとつの癒しHeilであることのみが許されるのに対して、医者にとってはひとつの窮境Notであることしか許されない。』¹⁾

病いの意味は、病む人の内側からのみ現実化されて、一つの治癒となりうる。しかし、医者にとっては、病むことの意味は、あくまでもかれが援助の手をさしのべる一つの窮境でなければならないというのである。治癒を、そして病いの意味を、医療者が患者に与えることはできない。そもそも人が人に治癒を与えるということは不可能である。なぜなら、治癒の本質は、みずから癒えること、おのずから癒えてくるということにあるのだから。

それをもたらす力がいわゆる自己治癒力であり、生命の自然治癒力である。

われわれはさしあたり、西洋古代におけるこの概念の出自を確かめることによって、そのように呼ばれる力の本質とは何であるのかを探ってみよう。

II. 西洋古代の医学哲学における「ピュシス」の概念

生命の自然治癒力について考えようとするとき問題となるのは、いうまでもなく自然の概念である。そして西洋古典文献のなかで自然の概念に相当すると見られるのは、言うまでもなくギリシア語のピュシス φύσις 概念である。この概念が使用された最も古い例は、ホメロスに見出される²⁾。薬草モーリュがどのよ草であるかを神々の使者ヘルメスが示して見せる場面である。動詞ピュエイン φύειν（「生みだす」；「成長する」「なる」）から派生したとすれば、ピュシスとは根源的に「あるものの性質ないし本性」と、「生成ないし発生」という二つの基本義を包括することになるだろう。では、こうしたピュシスの概念は、古代の医学哲学においてどのように用いられたのだろうか。

医聖ヒポクラテスに帰せられる或る医術書によれば、自然哲学者エンペドクレス（前490頃-430）にとってピュシスという言葉は、「いったい人間とは何であるか、人間ははじめどのようにして生じたか、何から組み立てられているか」を意味していた³⁾。しかし、この著者にとって、ピュシスは医術によってしか把握され得ない。「これをはっきり知るのには、医術そのものを全体として正しく把握してはじめて可能なのであり、……医術をきわめてこそ、人間とはいったい何であり、どんな原因によって生ずるのか、またその他のことを正確に知ることができる」というのである。それゆえ、ヒポクラテス学派の医師は、診断の過程で「すべての人間に共通のピュシス、および個々の人間〔病む人〕に特有のピュシス」を抛り所とすべきものとされた⁴⁾。

ヒポクラテス文書の他の個所では、いわゆる四体液が人間の身体のピュシスであり、健康とはそれらがうまく混和している状態であるとされる⁵⁾。また外科的な関連で言えば、ピュシスは、四肢が負傷のために暴力によっ

て強制される不自然な形とは逆の、「自然な形」や「自然態」を意味した⁶⁾。したがって、ピュシスは「本来の位置」と同義的に用いられることが多かった。そして、この自然状態を回復することが医師の課題とみなされた⁷⁾。

他面ピュシスは、呼吸、瞬き、嚥下のような不随意的な身体機能がそれによって制御される力ともみられた。そのさい、この力による意識的な行為は問題にならない。すなわち、

「病いを癒す者はピュシスである (Νούσων φύσις ἰητροί)。ピュシスは、癒す手だてを自分でみつけることができる。しかもそれは、熟慮してのことではない。たとえば、瞬きや舌をはじめ、そのようなすべてのものが手助けとなる。ピュシスは、何も教わったり学んだりせずに、必要な処置をほどこすことができる。」⁸⁾

これが「自然治癒力」という考え方が最も明確に表された典拠 (locus classicus) である。

プラトン (前428-328) も、対話篇『パイドロス』において、魂や身体の本性 (ピュシス) を理解するのにその全体の本性をはなれて満足に理解することはできない、という見解をヒポクラテスに帰している⁹⁾。しかし、プラトン自身がそこで展開する思考は、「能力/機能」(デュナミス δύναμις) の概念の探究である。そして、「それは本来 φύσει、能動的には何に対してどのような作用をあたえ、受動的には何からどのような作用を受けとるような性質のものであるかを、しらべる」(藤澤令夫訳) という方法に従って、魂の本性 (ピュシス) が特定されるのである。ここには、人体の内なる自然本性 (ピュシス) が、その能力/機能 (デュナミス) の発現としての作用や被作用を通じて顕在化するという、ヒポクラテス学派に固有の思考が読みとれる¹⁰⁾。

一方、最晩年の対話篇『法律』においてプラトンは、病気の自然本性 (ピュシス) を医者-患者関係という独自の視点から問題にする。

「自由人である医者は、病気をその根源から ἀπ' ἀρχῆς 自然本性に即して κατὰ φύσιν 吟味し、病む人自身ともその身内の人たちともよく話し合い、自分の方も

病む人からなにかを学ぶと共に、その病む人自身にもできるだけのことは教えてやる。そして、なんらかの仕方で相手を同意させるまでは処置の手を下さず、同意させたときでも説得の手段によってたえず病む人の気持ちを穏やかにさせながら健康回復の仕事成し遂げるべく努力するのだ。」¹¹⁾

このテキストは、インフォームド・コンセントという現代生命倫理の基本概念を根源的に基礎づけるという意味をもつだけではない。医療者と病む人との対話的な相互関係の中で、病気をその根源からピュシスに即して吟味するように求められているということが、きわめて重要である。ここには、後に見るようなヴァイツゼカーの〈医学的人間学〉の基本理念との強い親近性をみとめることができるだろう。プラトンにとって事物の自然本性を直知するにいたる道が哲学的問答法であったのと同様に、ヴァイツゼカーにとって医療者が同じ主体としての病む人を理解するにいたる道は対話にほかならないからである¹²⁾。少なくとも、患者を全体として観察するという考え方の導入を近代医学によってようやく達成された質的な挑戦として称揚する向きは、プラトンによって提示されたこの端緒がすでに2,500年前に医療者と病む人との相互関係において捉えられているということに驚きを禁じ得ないだろう¹³⁾。

さらに、同じ対話篇において自然学的無神論者たちによって「自然 (ピュシス)」と呼ばれているものは、「最初にある (第一次的な) ものの生成」のことなのであるが¹⁴⁾、生命原理としての「魂 ψυχή」が「自分で自分を動かすことのできる動」(τὴν δυναμένην αὐτὴν αὐτὴν κινεῖν κίνησιν) であることが証示される以上¹⁵⁾、「自然によってある」(εἶναι φύσει) と最も正しく言えるものは、彼らが主張するような火や空気などの物質的な基本要素ではなく、他の何よりも魂であることになる¹⁶⁾。それゆえ、病気の本質も身体を組み立てている基本要素の不均衡としてだけでなく¹⁷⁾、生命原理としての魂との関連において明らかにされねばならないのである¹⁸⁾。

一方、アリストテレス (前384-322) においては、ピュシスそれ自体がその哲学の中心テーマとなる。彼はピュシスのさまざまな意味を定義したうえで、その第一次的かつ決定的な意味として、「運動の始原をほんらい自

己のうちに含む事物の本質」(ἡ οὐσία ἢ τῶν ἐχόντων ἀρχὴν κινήσεως ἐν αὐτοῖς ἢ αὐτά) を析出する¹⁹⁾。ピュシスとは、「動と静止の始原・原因が付带的にではなく直接的・自体的(本来的)に内属しているようなものにおいて、そのものが運動変化したり静止したりすることの始原・原因となっている何ものか」²⁰⁾のことにほかならない。そして、ピュシスは「無駄なものは何も作らない」という明確な目的論が現れてくることにも注意しなければならない²¹⁾。

さらに、ガレノス(後129-199頃)は、アリストテレスの目的論的なピュシス概念の強い影響のもとで、ピュシスのうちに本質規定をあたえる審級を認め、これによって生成が規定されていると考えた。「自然はある目的ですべてのことを行い、無駄に行っているものは何もない」²²⁾というのである。人体の構造にはこのピュシスの理性的な統治が反映されているため、ガレノスにとって解剖学は「正真正銘の神学の始原」(θεολογίας ἀκριβοῦς ἀρχή) となる²³⁾。したがって、医師の仕事に関しては、「それらすべてのもののピュシスこそがデーミウルゴス[すなわち治癒力そのもの]なのであり、医師はその援助者」(ἀπάντων δ' αὐτῶν ἢ μὲν φύσις ἐστὶ δημιουργός, ὁ δ' ἰατρός ὑπηρέτης) の機能をもつにすぎないとされる²⁴⁾。

一方、ローマ医学におけるnaturaの概念は、ギリシア語のピュシス概念と広範囲にわたって完全に等しい意味で用いられた。ケルスス(後1c.頃)はこの概念を、まずは「自然的な性状」、たとえば「体質」(natura corporis)の意味で用いているが²⁵⁾、場合によっては何らかの作用力の意味でも用いている。

「(以上の病気の) 治癒はたいていのばあいそれ自身によって生じるのであるから、医術が用いるさまざまな手段の中で最大の力を発揮するのは自然であることがわかる。」(Ex quibus cum pleraque per se proveniant, scire licet inter ea quoque, quae ars adhibet, naturam plurimum posse.)²⁶⁾

しかもこの「自然に対抗されてしまえば、医学は何ら効果を上げることはできない」とさえ言われるのである²⁷⁾。

このように、古代の医学哲学においては一般に、ピュシスこそが治癒力そのものであり、医療者はその援助者の機能をもつにすぎないものと考えられた。それゆえ医療者は、診断にさいしてすべての人間に共通のピュシスと個々の病む人に特有のピュシスを根拠としなければならないのである。では、このように根源的な仕方であられたピュシスの概念を、医学が高度に技術化され、複雑に社会化され、またそれを補完するようにして心理化された現代において、われわれはどう受け止め、生かすことができるだろうか。この問いにまさしく医学的人間学の構築という試みをとおして答えようとしたのがヴァイツェカーだった。ここでとくに注目されるのは、彼の「エス」(Es)の概念である。彼のいう「エス」は、自然現象や人間の心的・身体的な諸状態を動かしているそれ自体認識不可能な「生命そのもの」の摂理であり、その意味において、まさしく古代のピュシス概念を受け継ぐものと見ることができるからである。しかし、そもそもこうした「エス」の概念を医療者として初めて大きく展開して見せたのは、G・グロデック(1866-1934)だった。次章では、まず彼の「エス」の概念について簡単に振り返っておこう²⁸⁾。

Ⅲ. グロデックにおける「エス」の概念

ベルリン大学で医学を学んだグロデックは、客観主義的・自然科学的な医学に対する批判的な立場をとり、自ら開業したサナトリウムでの自然療法的な治療経験にもとづいて、心的・身体的な諸現象のすべてを動かしている無意識的な生命力のようなものの存在を確信するようになった。この生命力を彼は「エス」と呼んだ。

「人間は、自分の知らないものに動かされているというのがぼくの意見です。人間のなかには『エス』というなにやら驚くべき力があって、それが、人間のすること、人間に起こることのすべてを支配しています。」²⁹⁾

「この考察のテーマは『エス』です。『わたしが生きている』ではなく、『わたしはエスによって生きられている』という考え方をとりましょう。」³⁰⁾

S・フロイトは、よく知られているように、グロデックが着想した「エス」を心の一部である無意識のこととして受けとって、これを「自我」と「超自我」とならぶ心的構造の一部として、いわば否定的に扱った³¹⁾。しかし、グロデックのいうエスにはもっと深い内実がこめられていて、彼はエスを、人間を含めた生物一般の生命原理、あるいは万物に遍在する自然の生命そのものと考えていた。われわれが「生きているleben」のではなく、われわれはエスによって「生きられているgelebt」のだという言い方は注目に値する。エスとはわれわれの生命を支配する根本的な原理なのであって、それが個々の生命を他動詞的に生きている。生きているのは個々の生命ではなく、生命の根源であるエスが個々の生命を生きているというのである。

このエスにとっては、物的／身体的なものとの心的／精神的なものとの境界はない。それは両方ともエスの表現であり、現象形態である。身体の病気はつねに同時に心の病気でもあり、心の病気はつねに同時に身体の病気である。そして、この心身両面にわたる病気を生み出す「張本人」こそがエスである。エスは病気を引き起こすだけでなく、自分で自分を治療しもある。健康であるかどうかの決定を下すのもエスの仕事なのだから、医師にできることは、エスの動向を注意深く観察して、エスの自己治療作用に手を貸すこと以外にないというのである³²⁾。

したがって、彼にとって「自我とは数多くあるエスの表現形態のひとつ」にすぎない。それゆえ、医療者は、治療にあたって、患者の「自我」に直接はたらきかけるだけでなく、患者の「エス」の言語を自ら習得することによって、個々の患者の本質へと入り込み、患者に「奉仕dienen」しなければならないのである³³⁾。ここにわれわれは、後にヴァイツゼカーが主題的に展開することになる「エス形成」、ならびに「医学への主体の導入」のモチーフが、すでに胚胎されていることを感じとることができるだろう。

ところで、精神病理学者の木村敏は、グロデックやフロイト、そしてM・ハイデガーの思惟を関係づけることによって、この「エス」の概念を西洋古代のピュシスの概念と重ね合わせ、「『エス』はわれわれを生かしている『生命そのもの』のことだということにもなるだろ

う」と述べている³⁴⁾。そして、まさにフロイトやグロデックと深くかかわりながら、この「生命そのもの」の摂理を医学の領域で探究し続けたのが、ヴァイツゼカーだった。さしあたりわれわれは続く二章で、木村の解釈に従って、ヴァイツゼカーの「エス」概念が、彼独自の「主体」の概念と関連づけられることによって、いかに析出されたのかを概観しておこう。

IV. ヴァイツゼカーにおける「エス」の概念

木村が指摘しているように、ヴァイツゼカー自身が「エス」について最初に主題的に論じたのは、彼がフロイトの精神分析の大きな影響のもとに執筆し、フロイトの推薦によって『国際精神分析学雑誌』に掲載された論文「身体事象と神経症」（1933）の第11章「症例A——モラル性の後退とエス形成」においてだった³⁵⁾。

若い男性患者Aは、重い排尿障碍のために分析療法を受けていた。この排尿障碍は、彼自身によって自慰に対する神罰である脊髄障碍のためだと見なされていたのだが、6ヶ月続いた治療のほぼ中頃に彼が扁桃炎に罹ったのと同時に消失し、これを転機として彼の心身症全体が治癒に向かった。

「この排尿障碍が彼にとってまだしばらくは罰、あるいは罪の作用と見なされていたが、後になってさらに扁桃炎に罹ったときには、彼の自我に対するこの桎梏は断ち切られている。この場合はその病気がひとつのエスein Esであり、ひとつの非自我ein Nicht-Ichであり、ひとつの『風邪』なのである。それはもはや心理化したり主観化したりできない、なにか客体的なものであり、悟性の領域で客観的・論理的なカテゴリーを用いる以外、研究も説明もできないものである。」³⁶⁾

「モラルに関わる面が後退するに伴って、ひとつの非人格的／非人称的な『エス』である病気に對してzur Krankheit als einem unpersonlichen Es客体的・悟性的に関わるという態度が発生してきた。」³⁷⁾

ここで「客体的なもの」と言われているものは、木村が強調しているように、患者がその主体的な目で見えて客体として形成したものである。つまり、ヴァイツゼカー

が「エス」と呼んでいるものは、グロデックやフロイトの「エス」のように、治療者・研究者によって理論的に構築されたものではない。症例Aの場合、分析治療が進むにつれて、はじめ彼自身が恥ずべきことと捉えていた「自然なこと」からモラルに関わる面が後退して行った。そしてあるとき「風邪」を引いた彼自身が、この病気に對して、それを非人格的／非人称的な「エス」とみなして、客観的・悟性的に関わるができるようになったのである。医療者との相互関係に基づいて病む人自身のうちに生じるこのような出来事が、「エス形成」Es-Bildungと呼ばれる事態である。

この事態に見られる「エス」概念の使い方こそ、精神分析との決定的な違いであることを、ヴァイツゼカーは自伝的な告白録『自然と精神』（草稿1944）において明言している³⁸⁾。フロイトはあくまでも唯物論的な自然科学者として、「エス」に支配されていた心的行動の「主体性」を自我のために回復してやることを目指した³⁹⁾。それに対して、ヴァイツゼカーは医学者でありながら、病む人と共に根源的な人間の本性（ピュシス）を追求することによって自我の自覚をうながすだけでなく、病む人とその環境との出会いの場において「エスの自覚」をうながす医療者であろうとしたのである⁴⁰⁾。ここにわれわれは、病む人と医療者との対話的な相互関係のなかで病気をその根源からピュシスに即して吟味するように求めたプラトンの視点が具体化されているのを見ることができるだろう。

さらにヴァイツゼカーは、この告白録のすぐあとの個所で、これを契機に「エス形成」という言い方に慣れてきた考察の道をこう振り返っている。

「しかし、〔精神分析が〕エスを心的機構へ導入したことによって、身体世界はもはや不必要なものになった。エスは非自我なのに自我はエスの分化した一部にすぎないという両義性は、これを純粹に心的な事態とみなす場合にのみ、いわば合法化されていたのである。無意識の概念と同様に大きな論理的矛盾をふくむこの両義性にはすでに決着がついているなどと考えるはならない。むしろわれわれは、次のような事態になじまなくてはならない——すなわち、〔患者において〕エスが自我を含んでもいるし、自我から排除されてもいるのであって、その

結果、研究者とその学問（学問はともかく自我の機構の中のみ）に存立するのであるが）には、両方の視点を生かす以外に道がないという事態にである。そこで、このことは次のように言い表すことができる。エスは人間にとって恒常的で確固とした基盤ではなく、いわば不断にただ形成され続けるのみで、けて恒常性には到達することがない、と。」⁴¹⁾

ここでわれわれが注意しなければならないのは、彼がこの考察の道を歩み出すための分岐点となったのが、ゲシュタルトクライスの理念だったということである。なぜなら、彼にとって「ゲシュタルトクライスの理念とは、病む人に対する医療者の関係において *in der ärztlichen Beziehung zum Kranken* 私に顕わになっていた生命過程の形式の理論的抽象にほかならなかったからである」⁴²⁾。そしてわれわれは、ここで示されるエス概念の特徴が『ゲシュタルトクライス』（1940）における「主体」(Subjekt) の概念を彷彿とさせることにも注意しておこう。じじつそこでは、「主体とは確実な所有物ではなく、それを所有するためにはそれを絶えず獲得しつづけなければならない」⁴³⁾ とされているだけでなく、そもそも医学への「主体の導入」ということが〈医学的人間学〉の主眼点とされていたからである⁴⁴⁾。はたしてヴァイツゼカーは、「エス」概念を彼独自の「主体」概念とどのように関連づけているのだろうか。

V. ヴァイツゼカーにおける「主体」の概念

ドイツ語のSubjektという概念は、カント以来、意識的・精神的な認識や行動の中心原理として「主観／主体」と訳され、つねに意識、自我、自己との相関関係において語られてきた。しかし、本来この語は、ギリシア語の *ὑποκείμενον*（下に置かれたもの＝アリストテレスのいわゆる「基体」）のラテン語訳 *subiectum* に由来している。とすれば、必ずしもこれを個人の意識に内在させねばならないわけではない。じじつ英語やフランス語では *subject* や *sujet* が「意識の対象」に近い意味で用いられている。ヴァイツゼカーは、まさにこうした古典的な用法にかえて、この概念を個人の意識という枠組みから外して見せたとみることができる。たとえば『ゲシュタ

ルトクライス』においてSubjektは次のように定義される。

「古典的自然科学の問いが『認識が客観を認識する Erkenntnis erkennt Objektives』という形式だったのに対して、新しい問い方は『一つの自我がその環界に出会う Ein Ich begegnet seiner Umwelt』という形式をもつ。ここで『自我』と心的現象 psychische Erscheinung との一切の混同を防止するために、われわれは現象との結びつきをまだ残している自我の概念からそれと環界との対置の根拠を成す原理 *Prinzip* を取り出して、これを主体 *Subjekt* と呼ぶ。」⁴⁵⁾

つまり、「主体」とは「生きもの」がその環界とのあいだで、つねに接触の仕方を更新しながら両者の「相即」Kohärenzの関係を維持し、それによって生きつづけているという、両者の「出会いの原理」である。そのような意味での「主体」は、もはや個々の「生きもの」に一方的に帰属はしない。それはこの生きものと環界との境界に位置している。しかもこの生きものというのは、けっして意識や心をもって認識し行動している人間にかぎらない。広く動植物一般が、生きものとして生きている限り、環界とのあいだに「主体」を形成して自らの存在を維持しているのである。

「赤ん坊が生まれ、生命が消え、鳥が舞い上がり、獲物を目指して襲いかかり、人が目覚め、病気に罹る。物理学は、その研究において認識自我がそれからは独立した対象としての世界に対置されているものと前提している。生物学の経験するのは、生きものがその中に身を置いている規定の根拠それ自体は対象となり得ないということである。このことを生物学における『根拠関係 *Grundverhältnis*』と呼ぼうと思う。生物学を支配している根拠関係とはじつは客観化不可能な根拠への関わり合いであって、因果論にみられるような原因と結果のごとき認識可能な事物のあいだの関係ではない。

つまり根拠関係とはじつは主体性 *Subjektivität* のことであって、これは一定の具体的かつ直観的な仕方を経験されるものである。」⁴⁶⁾

前述のような境界が生きものの知覚や運動にとってその「下に置かれたもの」としての「主体」でありうるのは、生きものが生きているから、そして生きつづけてやっているといるからである。だから、ヴァイツゼカーは、「主体」を成り立たせている根本原理であるところの「主体性」を、個々の生きものと「生命一般」の根拠との「根拠関係」のことだとする。生きものは生命一般との根拠関係に依存しているかぎりにおいてのみ、生きることができる。そして生きものは、生きている限り、環界とのあいだで「主体」という名の出会いを繰り返すのである。

そしてこの「主体」の形成を、ヴァイツゼカーは『アノニユマ』(1946)において、M・プーバーの根元語「我-汝」と「我-それ」との対立を念頭に置きつつ、次のように「エス」の形成と関連づける。

『我』Ichは自分一人で存在するのではなく、出会いの場にある。『我』はなによりもまず『汝』Duと出会う。『汝』も同じように『我』と出会う。人間的なものすべてのパトリス的 pathisch なあり方には、それが存在的 ontisch でないことが本質的に含まれている。人称ということで言うと、それは非人称ではない、『それ (エス)』*Es* でないということである。だとすると主体たちにとってエスはどのようにして出てくるのか。主体たちはエスに出会うことができるのか。できるとすれば、どのようにしてか。これらの問いを、われわれはまず発生的に論じてみたい。するとそれは、エスの形成はどのようにして起こるのかという問いになる。こうしてパトリス的なあり方と存在的なあり方との関係がふたたび持ち上がってくる。それはさしあたり、生きものの生成という問題に関してである。

私がここでエスの形成というのは、人間において、なんらかの身体的変化となんらかの判断、陳述、思考との両方が、一つの行為のなかで成立するような過程のことである。だからそこで形成されるエスは、物質的な事実であると同時に一つの主体にとっての客体でもあるという二重のかたちで、二通りの意味で生じてくる。この考えの主張しているのはつまり、客体の成立と客観性の成立とは同じ過程の表裏両面にすぎないということである。身体的／物理的な見方と論理的な見方がここで一つに

なる。パルメニデスの考えでは、現実存在と、この現実存在についての判断や陳述や思考や態度とは切り離せない。」⁴⁷⁾

ヴァイツゼカーはここで、「思惟することとあることとは同じである」というパルメニデスの言葉によって、現実存在と思考とが相即の関係をもって「主体」を形成するという自らの考えを根拠づけようとしている⁴⁸⁾。人間の場合、その認識や行動をつうじてこのような意味での「主体」が形成されているとき、この主体はただちに「自我」として意識される。しかし、この主体はほんらい、そこで自我として意識されるようになる個体とその環界との境界面に形成されるものである。したがって、主体は一方で自我として意識されると同時に、他方でその外部に「客体」を析出して、「主客対立」の構図を作り上げる。こうやって形成された客体のことを、ヴァイツゼカーは「エス」と呼ぶ。その意味において、「自我」の形成と「エス」の形成とは同時に起こる一つの出来事なのである。

医療者と病む人の目標は治癒にある。そして治癒の本質は、「エス」の形成にある。同時に起こる一つの出来事である「エス」の形成と「自我」の形成が主客対立の構図のなかで捉えられたとき、それは自己治癒力、あるいは自然治癒力のはたらきとして認識される。そのはたらきが「自我」の面から見られるとき、それは自己治癒力と呼ばれ、「エス」の面から見られるとき、自然治癒力と呼ばれるのである。

それでは、そもそもこのような「エス」の概念を導入することによって、ヴァイツゼカーは「治療」という行為をどのように基礎づけようとしていたのであろうか。いうまでもなく治療は、生命の自然治癒力の発現を目指す行為にはかならないからである。最後にわれわれは、医療者と病む人との対話的な相互関係というプラトンの視点に立ち帰り、ヴァイツゼカーが構想した医学的人間学の基本思想との関連においてこの問題を考えてみよう。

VI. 医療者と病む人との相互関係における「エス」

ヴァイツゼカーは、その医学的人間学の構想を初めて公にした『医学的人間学小品集』の第一論文「医者と患者」(1926)において、現代の医学には「病む人に固有の教え」というものがないと述べている⁴⁹⁾。彼によれば、病理学にとって、人間は自然一般に対する特殊性、諸々の客観のなかの客観にすぎない。しかし、病む人の自然学は病む人の形而上学ではなく、病む人の現象はいまだに病む人の本質ではない。そして、病む人の本質は、視覚を通した客観的観察によっては見過ごされてしまう。したがって、そのとき重要になるのは聴覚である。「病む人の本質は助けを求めるうめき声のなかから聞こえてくる」のである⁵⁰⁾。

病む人の本質は窮境Notにある。それゆえ、医学的人間学の原現象とその知の主要対象は、「窮境にあって、助けを必要とし、そのために医者と呼ぶところの病む人」である。したがって、この学には「医学」とは違って、その病理学と治療とともに、医者についての教えと、窮境についての教えも含まれると、彼は言う⁵¹⁾。

病む人は、窮境にあって医者にこう訴える——「私は病気です」。医療者はこう訴えかける病む人をどのようにして「分かる／理解する verstehen」ことができるのだろうか。ヴァイツゼカーは次のように述べて、「誰かを理解する」ということと「何かを理解する」ということとを明確に区別する⁵²⁾。

「私はいま次のようなことに気づいている。つまり、私のこのことについての思案——すなわち、とにかく科学的に観察すれば、一個の解剖学的・生理学的構築物である患者が、いかにして『我あり』のようなことを語る場所にまでやって来るのかということについてのこの思案——は、かの『我あり』の可能性よりも何かさらにもっと予想だにしないことを明るみに出す、ということに気づいている。すなわち、考えることではないだけでなく、何かについて考えることでもない、理解するという事実、そしてその上にまた、何が考えられているかを私がまったく理解しないで、或る他者がかれの考えていることを考えているということにただ理解してい

るかぎりにおいては、そもそも私の理解 *mein Verstehen* ですらない、理解するという事実である。何というパラドクスだろう！ 私は理解している。しかし、その主体 *Subjekt* はどこにあり、ほんらい理解することとしてのこの理解することの客体 *Objekt* はどこにあるのか。その主体は、私の自我ではなく、他者の自我であり、その客体は、私の客体ではなく、他者の客体である。ここではもはや、或る他者についてのこの私の理解 *dieses mein Verstehen eines Anderen* を私が客観的 *objektiv* と呼ぶべきか、主観的 *subjektiv* と呼ぶべきかを私は知らない。というのは、明らかなように、誰かを理解すること *Jemand verstehen* と、何かを理解すること *Etwas verstehen* とは、まったく比較を絶した二つの事態だからである。私の理解がいわば他者の中へ入り込み込むのだから、われわれは、一つの術語を所有するために、この〈誰かを理解〉*Jemand-Verstehen* のことを、移入的な理解 *ein transjektives* と呼ぶことにしよう。」

ここで「移入的」と呼ばれた主観的でも客観的でもない理解の仕方の普遍的な意義を、ヴァイツゼカーは、M・プランクの論文「最近の研究に照らしてみた物理法則」⁵³⁾ を引用し、強調している。たとえ二人の人間が同じ出来事について矛盾したことを言表しているとしても、各人が自分自身にとっては正しいということがありうるということが、科学的な問題にもなっている。これでもって具象的な世界像のそれ自身との同一性が崩壊すると同時に、その普遍妥当性も崩壊する。そしてそのとき、もはや具象的な普遍妥当性をつうじては保たれなくなってしまっている共同性というものを科学的に樹立するという課題が生じるというのである。そこでは、『私』と『エス』とのあいだの切断面が、宇宙世界 *Kosmos* にくまなく広がるもう一つ別の新たなレベルに置かれているように見える」。要するに、「誰かを理解する」ということは、客観的に理解するということではありえない。なぜなら、この誰か自身が、私と同様に、私／自我 *Ich* というものをもっているからであり、まさにその私／自我が、私と同様に主体 *Subjekt* であるがゆえに、客体 *Objekt* と「なる」ことはできないからである。さりとて、かれを（エスをではなく！）理解することはできる

のである⁵⁴⁾。

この文章は、ヴァイツゼカーが「エス」の概念を用いた最も早い例の一つである。ここで『私』と『エス』とのあいだの切断面』と言われているものが、フロイトの「自我とエス」を強く意識したものであることは明らかである。そしてこれをフロイトとは違った「別の新たなレベル」に置いてみようとする意図もまた明白である。そして、これが後にゲシュタルトクライスの理念へと抽象化される以前の「生命過程の形式」の一端であることは言うまでもないことだろう。ただし、ここで問題になっているのは、さしあたって人称性と非人称性との区別である。純粋に客観的な「エス思考」（それは自然科学的にエスを思惟することなのだが）には、痛みを正確に、ということ、痛みをまさしく私／自我とエスとのあいだの宙ぶらりんの決断として思惟する能力がない⁵⁵⁾。その能力をもつのは、私／自我を意識化する主体であり、人格であり、プラトニックな対話する魂なのである。

「誰かを理解する」ためには、抽象に向かってではなく、具体的なものに向かって出立しなければならない。「私は病気なのです」という言葉を聞くと、下手な医者はずぐさま、舌、肺、心臓、尿の検査をする。しかし、「その検査は、『私／自我』をなんらかの『エス』によって置き換えることであり、したがってまず第一に、観察結果の偽造であり、与えられたものから、すなわち経験から逸脱すること」だと彼は言う⁵⁶⁾。その「エス」は病む人自身によって形成されたものではないからである。では、よい医者ならどうするのか。「君はどこが悪いの？」と問うのである。始まりは生活史的な場面であり、さしあたり対話なのであって、第一に医療者がとるべき行為は問いである⁵⁷⁾。このように、病む人を理解するためには、病む人の「私／自我」をなんらかの「エス」に置き換えて客観的な理解を得たつもりになるのではなく、病む人と医療者とが「主体」どうしの対話的な相互関係をもたなくてはならない。そのような「生の相互性」がなければ、医療者が病む人自身に「エスの形成」を促し、癒しをもたらすことはできないのである⁵⁸⁾。

さらに、これに続く『医学的人間学小品集』の第二論文「痛み」（1926）において、ヴァイツゼカーは、「アク

テュアリティというものはそもそもつねに理解不可能なものだ」と述べている⁵⁹⁾。彼によれば、他者の痛みの現実活動そのものを「理解する」などということとはできない。しかし、痛みは、あらゆる生きとし生けるものの共感性をつうじて、痛みの表現の知覚から経験されはする。だからこそ、私はその痛みから身を背けるか、それに身を向けるかせざるをえない。そして、痛みに向けることを選択することこそが、医療者に固有の職務だということである⁶⁰⁾。

一方、痛みをもっている他者としての病む人は、かれの知覚そのものを所有しているのだから、その痛みに向けることを選択することができない。痛みがかれのうちの一つの座を占めているからである。では、その痛みは〈私／自我の状態〉なのか、それとも〈エスの状態〉なのか。それは両方の要素をもっていると、ヴァイツゼカーは言う。つまり、痛みは「エスによる私／自我の触発 *Affektion des Ichs durch das Es*」の最も明瞭な代弁者である。痛みほど「私であること／自我存在」が何らかの〈私でないもの／非我存在者〉からもぎ離されること *Entwindung*」の特徴を示すものはない。しかし、われわれは、痛みにおいてこのようにもぎ離されることによって、世界との邪魔されることのない同一性という夢から目覚めることができる。このように痛みは私に「エス」を示すが、しかし同時に、痛みは私を「エス」と結びつける。「痛みにおいて、一つの存在は一つの

『私／自我』と一つの『エス』に分裂しようとする、と同時に、この存在は一性を保とうとする」のである。こうした或る生けるものの分断をめぐる宙ぶらりんの未決着の闘いとして、痛みは、或る決断——すなわち、私の部分からこの私が分離を遂行して恒常化するのか、あるいは私の統一を回復し、すなわち癒されるのかの決断——を強いる。その意味において、この決断は、「死と生のあいだの決断の比喩」でもあるのである⁶¹⁾。

病む人が形成する主体におけるさまざまな活動を、ヴァイツゼカーは〈痛みの仕事〉と呼ぶ。そして、この〈痛みの仕事〉の成果が〈決断〉 *Ent-Scheidung*、すなわち、分断を取り除いて一体化することであり、何らかの「エス」が排斥されることによって自己 *Selbst* のそれ自身との単一性が回復されることである⁶²⁾。これこそ、生命の自然治癒力が発現する瞬間である。したがって、ヴァイツゼカーにとって、治療とは、病む人との対話的な相互関係のなかで、かれに「自我の自覚」をうながすだけではなく、かれとその環界との出会いの場において積極的に「エスの自覚」が生まれるようにうながすことである。このようにしてヴァイツゼカーは、医療者と病む人との対話的な相互関係のうちに生命の自然治癒力（ピュシス）が発現する場を見出し、こうした「生の相互性」を一つの礎石として彼の〈医学的人間学〉を構築しようとしたのである。

文献表

ヴァイツゼカーからの引用はすべて Viktor von Weizsäcker (VvW), *Gesammelte Schriften in zehn Bänden* (GS), hrsg. von P. Achilles, D. Janz, M. Schrenk und C. F. von Weizsäcker, Suhrkamp, Frankfurt a. M. による。邦訳文献を積極的に利用させていただいたが、訳文は主として文脈上の理由から適宜改変されている。

AK 1926=*Der Arzt und der Kranke*, GS 5, 9-26, 1987. 「医者と患者」

S 1926=*Die Schmerzen*, GS 5, 27-47, 1987. 「痛み」

KG 1928=*Krankengeschichte*, GS 5, 48-66, 1987. 「病む人の物語」

KN 1933=*Körpergeschehen und Neurose*, GS 6, 119-238, 1986. 「身体事象と神経症」

SP 1935=*Studien zur Pathogenese*, GS 6, 253-330, 1986. [邦訳]『病因論研究』(木村敏・大原貢訳), 講談社学術文庫, 1994年.

G 1940=*Der Gestaltkreis. Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen*, GS 4, 81-338, 1997. [邦訳]『ゲシュタルトクライス』(木村敏・濱中淑彦訳), みすず書房, 1975年.

- NG [草稿1944]1954=*Natur und Geist*, GS 1, 9-194, 1986.『自然と精神』
- BE [草稿1945] 1949=*Begegnungen und Entscheidungen*, GS 1, 195-402, 1986.『出会いと決断』
- A 1946=*Anonyma*, GS 7, 41-90. [邦訳]『生命と主体——ゲシュタルトと時間／アノニユマ』(木村敏訳), 人文書院, 1995年.
- PM 1949=*Psychosomatische Medizin*, GS 6, 451-464. [心身医学]

註

- 1) VvW : *KG* 1928, GS 5, 66. 彼は、医者－患者関係を核心にすえ、内科学、生理学、精神分析、社会医学、哲学などを総合した普遍的な人間学の構築を目指し、それを医学的人間学と呼んだ。その生涯と思想については、VvW : *SP* 1935の邦訳に付された木村敏による解説を参照されたい。Vgl. Sekundaerbiblio VvW 151012.xls, in : viktor-von-weizsaecker-gesellschaft.de
- 2) ホメロス『オデュッセイア』第10歌303行。Vgl. K. Deichgräber, “Die Stellung des griechischen Arztes zur Natur,” in : *Ausgewählte kleine Schriften*, Weidmann, 1984, 84. Chantraineはこの箇所を、この言葉のホメロスにおける唯一の用例として、《forme naturelle》, 《nature》の訳語と共に φύομαι の項に挙げている (P. Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, 1968-77, Paris, 1234)。その語源についても、同項を参照されたい。なお、特に断らないかぎり、本稿における西洋古典文献の邦訳はすべて筆者自身によるものである。
- 3) ヒポクラテス文書『古来の医術について』20, L 1. 660sq.
- 4) 同上『流行病』I. 23, L 2. 668sq.
- 5) 同上『人間の自然性について』4. 1-5, L 6. 38-40.
- 6) 同上『骨折について』2, L 3. 418sq. et 424.
- 7) 同上『疾病について』I. 10, L 6. 158.
- 8) 同上『流行病』VI. 5. 1, L 5. 314.
- 9) プラトン『パイドロス』270bc.
- 10) J. Souilhé, *Étude sur le terme dynamis dans les dialogues de Platon*, Paris, 1919.
- 11) プラトン『法律』IV. 720d 1-e 2.
- 12) 後註57) 参照。現代日本の精神病理学者、木村敏による次のような言葉にもこのプラトンの視点が生きつづけていることは注目に値する。「私の場合、『臨床哲学』は基本的に患者と私自身との二人関係の中で営まれ、精神病理学の枠内での営為として、患者個人の病んでいる病気の本態を明らかにすることを窮極の目標としている」(第12回河合臨床哲学シンポジウム [2012年12月16日、於：東京大学] 当日の配付資料より)。
- 13) Vgl. D. Mielke, *Die Heilkunst als Vorbild in Platons Staatslehre und Ethik*, Hildesheim, 2005, 43. ただし、この問題については、プラトン哲学の文脈の中であらためて論じる必要があるだろう。
- 14) プラトン『法律』X. 892c 2-3.
- 15) 同上895e10-896a 2.
- 16) 同上892c 3-5.
- 17) プラトン『ティマイオス』81e-87b.
- 18) 同上87c-89d.
- 19) アリストテレス『形而上学』V. 4, 1014b16-1015a19.

- 20) 同上『自然学』II. 1, 192b.
- 21) 同上『政治学』I. 1253a 9.
- 22) ガレノス『自然の諸力について』II. 4, K 2. 91.
- 23) 同上『人体部位の有用性について』XVII. 1, K 4. 360sq.
- 24) 同上『医術』26, K 1. 378.
- 25) たとえば、ケルスス『医学論』1, 3, 13.
- 26) 同上2, 8, 20.
- 27) 同上3, 1, 4.
- 28) 「エス」の概念そのものの誕生と発展については、互盛央『エスの系譜——沈黙の西洋史』（講談社、2010）を参照されたい。
- 29) グロデック（岸田・山下訳）『エスの本——無意識の探究』（誠信書房、1991）p.12. Georg Groddeck, *Das Buch vom Es : Psychoanalytische Briefe an eine Freundin*, Wien, 1923.
- 30) グロデック「エスについて」：グロデック／野間俊一『エスとの対話』（新曜社、2002）p.237. *Über das ES* (1920), in : Georg Groddeck, *Psychoanalytische Schriften zur Psychosomatik*, hrg. von Clauser, G., 46-76, Wiesbaden, 1966.
- 31) フロイト『自我とエス』1923. この概念をめぐるグロデックとフロイトとの確執については、グロデック／野間俊一、前掲書、序説を参照。
- 32) グロデック（木村敏訳）「エスの探究としての心身医学研究——行われなかった講演から——」（『精神分析』第3号、1995、37-53）p.41-44. Georg Groddeck, “Psychosomatische Forschung als Erforschung des Es. Aus einem nicht gehaltenen Vortrag,” in : *Psyche* 4/10, 481-487 (1950/51) 参照。
- 33) グロデック／野間俊一、前掲書、p.138 sq. 参照。
- 34) 木村敏「エスについて」『分裂病の詩と真実』（河合文化教育研究所、1998）p.218 sq. 本稿がなるにあたって、この論文から裨益されるところ大であった。ここにあらためて謝意を表す。
- 35) VvW : *KN* 1933, GS 6, 213-227. この症例については、『病因論研究』をも参照。Vgl. VvW : *SP* 1935.
- 36) VvW : a. a. O., 217.
- 37) VvW : a. a. O., 219.
- 38) VvW : *NG* [1944] 1954, GS 1, 166.
- 39) 「エスがあったところに、自我を成らしめること」という有名な標語を参照されたい。S. Freud, *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1933) : GW, XV. 86. 『続精神分析講義』31講。
- 40) 後にヴァイツゼカーは、前註の標語に対する補完として「自我であったものを、エスと成らしめること」という標語を提起した。VvW : *PM* 1949, GS 6, 462.
- 41) VvW : *NG* [1944] 1954, GS 1, 167sq.
- 42) VvW : a. a. O., 170.
- 43) VvW : *G* 1940, GS 4, 300 [邦訳277].
- 44) VvW : a. a. O., 96sq. [邦訳20sq.].
- 45) VvW : a. a. O., 299 [邦訳275sq.]. ただし、この個所の翻訳にかぎり、テキストは1940年の初版による。その根拠については、木村敏『臨床哲学講義』（創元社、2012）p.76参照。
- 46) VvW : *G* 1940, GS 4, 318 [邦訳298].
- 47) VvW : *A* 1946, GS 7, 59 [邦訳118sq.].

- 48) パルメニデス「断片」3 (DK). [藤澤令夫／内山勝利訳『ソクラテス以前哲学者断片集』第Ⅱ分冊, 岩波書店, 1997].
- 49) VvW : **AK** 1926, GS 5, 12.
- 50) VvW : a. a. O., 13.
- 51) VvW : a. a. O., 13sq.
- 52) VvW : a. a. O., 20.
- 53) M. Planck, *Physikalische Abhandlungen und Vorträge*, Bd. III, Braunschweig, 1958, 167.
- 54) VvW : a. a. O., 22.
- 55) VvW : **S** 1926, GS 5, 33.
- 56) VvW : **AK** 1926, GS 5, 24.
- 57) VvW : a. a. O., 26.
- 58) 「生の相互性」が、「死の連帯性」とともに〈医学的人間学〉の示導動機となることについては、拙稿「〈医学的人間学〉の根本概念——V.v. ヴァイツゼカーにおける医学倫理の生成をめぐって——」『医学哲学 医学倫理』第30号, 2012, 40-51を参照されたい。
- 59) VvW : **S** 1926, GS 5, 30.
- 60) VvW : a. a. O., 31.
- 61) VvW : a. a. O., 32sq.
- 62) VvW : a. a. O., 41.

The Natural Healing Power of Life

— A Study on the Concept of “Es” in Viktor von Weizsäcker —

MARUHASHI Yutaka

Abstract

For the Hippocratic school representing the ancient western philosophy of medicine, the only true medicine is a correct understanding of the nature (physis) of human beings. Physis is the healing power itself, and the doctor's function is only to provide assistance to it. Plato, on the other hand, presents his original perspective that the physis of a sickness should be examined in the mutual relationship between doctor and patient. In the modern period it was G. Groddeck who revived such a concept of physis with his idea of the “Es” (It). In this article I intend to describe how Viktor von Weizsäcker, on the basis of the influence of Groddeck and Freud, related this concept of Es to his original concept of the “Subjekt” (subject) and contextualized this in his conception of Medizinische Anthropologie (Medical Anthropology) as his original Platonic perspective of the mutual relationship between doctor and patient.

First, after verifying that Groddeck's concept of Es means the unconscious life-force which is moving all of mental and physical phenomena, I examine how Weizsäcker uses this concept in his article “Body-events and Neurosis”, his autobiography *Nature and Mind* and his main work *Der Gestaltkreis*.

Secondly, I analyse the context in which the concept of Es was introduced into his earliest articles “The Doctor and the Patient” and “The Pains”. And after that, I will clarify that for Weizsäcker medical treatment means that a health professional urges a sick person in correlation with her to form an Es as well as an “Ich” (I) as a representation of her Subjekt being true point of encounter between her and her environment.

In this way he found out the place in which the natural healing power (physis) of Life is revealed in the mutual relationship between a health professional and a sick person, and he tried to build up his Medizinische Anthropologie with “the mutuality of life” as one of its cornerstones.

Key words : natural healing power ; Viktor von Weizsäcker ; physis ; It (Es) ; subject (Subjekt)